

牛久：学校周辺に見る自然

第1号 ひたち野うしく小学校

2018年4月22日発行

＜ 春の学校周辺で生きもの観察 ～①花に来る虫たち＞

久しぶりです。いろいろ思うところがあり中絶しておりましたが、年度が変わり、元気な子どもたちを前に再開したい気持ちになりました。今回は4月12日にひたち野うしく小3年生と観察した花と、そこに来ていた虫たちを紹介しします。



セイヨウタンポポ(左)とその花みつを吸うシロスジヒゲナガハナバチのおす(右下)。

「春の花という？」と聞くとまず最初の方に出てくるタンポポ。校庭や周辺でたくさん見られるのはヨーロッパからやってきたセイヨウタンポポですが、その8割は日本のタンポポとの雑種だそうです。ハチやチョウなどがやってきて、みつを吸います。



こちらはノゲシ。ハチやチョウ、ハナアブなどが来ますが、花はタンポポに似ていますね。同じ「キク科」のなかまで、実が熟すと、やはり綿毛で飛んでいきます。よく似た、オニノゲシも見られました。これもヨーロッパからやってきましたが、どこがちがうか、くらべてみましょう。そのちがいが分かったら、両方のとくちょうをもったアイノゲシも、気をつけてさがせば見つけられるでしょう。

ノゲシ(上左)とその花粉をなめに来たナミホシヒラタアブ(上右)。よく似てるがヨーロッパから来たオニノゲシ(下左)と、それらの中間のとくちょうをもったアイノゲシ(下右)



ブタナ(左)とその花みつを吸^すう小さなハチ(右)。

もう一つ、タンポポとよくまちがえられる花。これもヨーロッパから来た草で、**ブタナ**です。ハチやハナアブのなかまが、みつや花粉^{かふん}を求^{もと}めてよくやってきます。



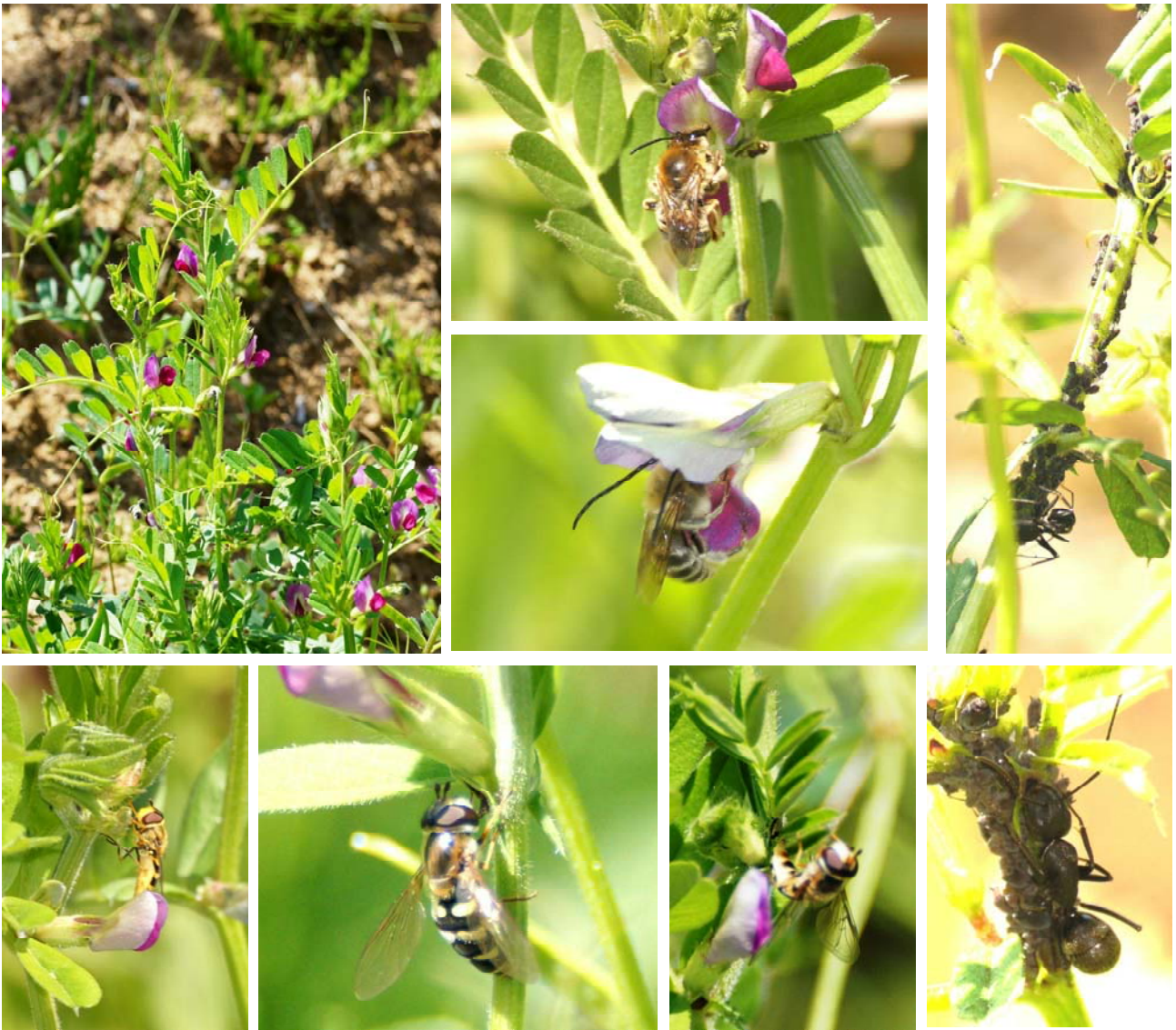
ノボロギク(左)とそこでアブラムシを食べるナナホシtentウ(右)。

小さいけれど、やはり綿毛^{わたげ}でタネを飛^とばすノボロギク。アブラムシがついていることも多く、ナナホシtentウがきて、食べていました。



こちらも小さな花ですが、つくりがちがいます。ハコベのなかまで、ヨーロッパからきた**オランダミナグサ**。花のまわりの毛^けからねばねばした液^{えき}を出し、さわるとべたべたします。ナミtentウがアブラムシを食べていました。

オランダミナグサ(左)と、そこにつくアブラムシを食べるナミtentウ(右)。



カラスノエンドウ(上左)とその花みつを吸^すうニッポンヒゲナガハナバチのおす(上中の上)とシロスジヒゲナガハナバチのおす(上中の下)。茎^{くき}から汁^{しる}を吸^すうアブラムシと、あまいつゆをもら^うアリ(上右)。ナミホシヒラタアブも花粉^{かふん}をなめに来たり(下左)、花外蜜腺^{かがいみつせん}のみつをなめたり、たまごを産^うんだりしていた。クロオオアリも花外蜜腺^{かがいみつせん}の蜜^{みつ}を食べていた。

マメのなかまカラスノエンドウには、いろいろな虫が集まります。花にはミツバチやハナアブのなかま。茎^{くき}の先にはアブラムシ。そのまわりにアリやテントウムシ。そして、葉^はのつけ根の小さな托葉^{たくよう}の黒い部分(花外蜜腺^{かがいみつせん}という)からもみつを出^だして、ここにもアリやハナアブが集まります。

最後にシソのなかまヒメオドリコソウと、そのみつを吸^すいに来^きたルリシジミ。シソのなかまは花の形^{しかく}や四角^{くき}い茎^は、葉^はをもむと独特^{どくとく}のにおいがするなどのとくちょうがあります。【理科支援員：宮内】



ヒメオドリコソウ(左)とみつを吸^すいに来^きたルリシジミ(右)。ヤマトシジミとは、はねのもようや目の色で見分けられる。